

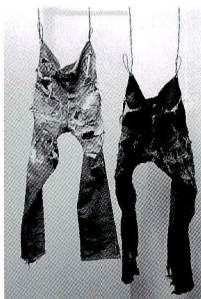


デザイナー
渡部 宏一
WATANABE KOICHI

鳥取県出身、京都在住。商業施設設計者である父の影響を受け、デザインの道へ進む。「MORIKAGE SHIRTS KYOTO」にて、オーダーメイド及び既製服のデザイン・製造を学び、'06年より京阪神にて複数のセレクトショップを手掛ける「GADGET INC.」に所属。企画・生産を担当後、'08年A/Wシーズンに「PECULIAR CULTURE」をコンセプトとするブランド「N4」を立ち上げる。

京 KYOTIAN I.D.
京のおきばりさん

取材・文/山田涼子 撮影/石川奈都子
撮影協力/BLOC



元はノーダメージのリーバイス501が、ご覧のとおり。東京でアルゼンチン人デザイナーにいきなり「写真を撮らせてくれ！」と頼まれた逸話を持つ1本で、「ちくちく直しつつ10年以上ははき続けてきた」ため、愛着もひとしお

折り紙のような魅力を放つ、 ジャポネスク的服づくり。

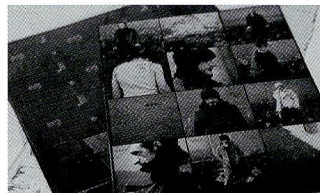
一枚の紙からできる美しい立体——「折り鶴」。服飾デザイナーである渡部さんが言う「日本的」を例えるなら、そういうことだ。生地という平面からつくる彼の洋服のドレープの生かし方は、一見窮屈そうに見える着物が持つ「ゆとり」ではないか。彼のルーツを辿れば、高校時代に魅了されたモード系ブランドに行き着く。「ヨウジヤマモト」「イツセイミヤケ」などが世界に放ったジャポネスクデザインは、世界中のデザイナーたちに強烈な印象を与え、影響された海外デザイナーも少なくない。「コム・デ・ギャルソンのパターンはとても日本っぽい」と渡部さん。とはいえ、「ブランドの知識はあまりないんです。古着か自作しか着ないので(笑)」。憧れはしたものの、一介の高校生がそう易々と買えるものではなかった。ならつくればいい。この転回点がデザイナー渡部宏一の原点だ。思い返せば家族のためにポタンをつけてあげる小学生だった。喜んでくれるのがうれしくて、針と糸は玩具のようでもあった。

デザイナーという「服づくりの最初の段階」に収まるのではなく、納品・発送、伝票整理…と、何でも自分で行いたい性分と経験が、工場にも頻りに足を運ばせる。全ての現場を知るからこそ、できることがある。それは本当の意味のマルチタスクだ。「悪くても安ければ売れる時代」にテコ入れしたい。つまりそれは、「高くても良いものは残る」ということ。そのためにも、関わる職人さんの技術の継承を支え、再現性を高めたい。そのための自社工場である。彼らと同じように、「世の中の歯車のひとつになれたら」という言葉は謙虚さであり、同時に「五」というブランドの「軸」であるという誇りだ。どんなに小さな歯車でも、ひとつ欠ければ動きは止まる。独立してやってきた経験があるからこそ、会社という組織の中でこそ出来ることがかかるのだ。

ヨウジやミヤケ、彼らに影響を受けた海外メゾンに追いつけ追い越せ、ではなく、日本人としての遺伝子に組み込まれている花鳥風月を愛でる気持ちや、海外旅行先でダシを恋しく思うような感覚を研ぎ澄ましていく。時に歯車として、時に軸としてその感覚を使う。それこそが、どんなジャンルであろうと、何かを生み出すことを生業とする者にとって最も大切なことなんだと、彼のつくる洋服たちは叫んでいるのだ。



父親が商業施設の設計を生業にしていたため、事務所を兼ねていた自宅では数多の本に囲まれて育つ。それらはいまでも、渡部さんにとっての原点であり、貴重な資料にもなっている。畑は違えど「デザインDNA」の結晶だ



秋冬の新作「INSIDE OUTSIDE」。モデルには、東京のパーでスカウトしたギタリストを起用し、京都・東福寺にて撮影。オールハンドメイド仕様「クラシックジャケット」5万9000円、「オリエンタルコート」6万4000円

information

「GADGET INC.」

京都市中京区富小路通三条上ル福長町103
BLOC2F
☎075-213-2252
<http://www.minddrive.com>